

確かな願いをもち、創造力を育む図画工作・美術科学習

— 「2066年 宇宙でくらすう」思考の多様性の中で感性豊かな表現を追求する —

1 題材のねらい

ペットボトルの素材の特徴や形から見立てた、宇宙での居住空間や宇宙船を、紙粘土や紙素材の材料を用いて作ることができる。50年後の宇宙でのくらしをイメージしながら、表したいことがらを感性を働かせながら豊かに追求することができる。

2 授業の構想

(1) 子どものとらえと資質・能力について

次の文章は、松江城のスケッチに水彩絵の具で色をつける学習活動後の日記である。

今日、図工が1,2時間目にありました。今日は、絵の具を使って松江城の絵をかきました。もう少し、絵の具をうすくしてみたいと思いました。ぼくは、絵の具マスターになりたいと思います。 (児童A)

本学級の子ども達は、図画工作の学習がとても好きである。絵の具を混ぜて色を作り出すことでも友だちと見せ合い、よさを認め合いながら、楽しんで造形活動に取り組むことができる。4年生になり、表現テーマについてじっくり考え、新しい技法や表現方法に出会うことでより深く豊かに学ぶことができる時期を迎えている。

子どもは、自分が表したいと考えていることについて漠然としたイメージを出発点としていることが多い。素材や技法と向き合ったり、発想や構想を図や絵、言葉に表したりすることで、イメージを具体化・具現化する過程をたどる。よりよい表現方法や発想を引き出すために、自分が表したいと考えていることを自分自身が明確につかむことが大切である。児童Aのように、考えを明らかにして、見直しを図りながらよりよい方法を選択していくことで、学びは自覚され、学び方とともに資質・能力を身に付けることができる。

(2) 資質・能力を育むために

本題材では、50年後の近未来に宇宙で暮らす様子を表現テーマに設定し、このテーマと子ども達は出会うことにしている。50年後の自分を想像してみたり、今のくらしが宇宙であったらどうなっているかを想像したりする楽しみがある。夢を描きながら形に作り出す活動は、子どもの自由な発想を引き出し、作りたいものに向かって学んできた知識や技能を活用する「創造力」を伸ばすことが期待できる。

表現テーマに向かって表したいことを見だし、材料や表し方を試しながら、願う造形表現に向かって主体的に取り組もうとする子どもの姿を期待している。

このような子どもの姿を求めて、次の2点を大切に指導していきたい。

① 造形表現の可能性を広げるために素材、技法などを吟味したり、表現テーマや表現意図に合致しているかなどについて検証したりできるように、新たな視点を示す。

4年生の子どもにとって、宇宙のイメージはとらえにくいものである。近未来の宇宙ではどのようなくらしをしているのか、居住空間や乗り物はどんなものなのか、身近なくらしからの連想や知識、図書資料などをもとに、友だちと語り合い、想像力を働かせて自由にイメージを膨らませて活動に取り組むようにしたい。その際はペットボトルやミラーペーパーなど素材と

関わりながら見立てを行い、素材や表現方法が表現テーマに結びつくようにする。また、漠然としたイメージを言語に表したり、図や絵に描き出したりすることで、具体化・具現化を図り、子ども自身が表したいことを明確につかむことができるようにする。表現テーマと素材の魅力が結びつくように関わらせたいと考えている。

② 子どもの造形表現への願いを確かなものにするために、子どもの必要感に応じた「掘り下げる」「提案する」など、考えの根拠や理由を明らかにする教師のはたらきかけを行う。

教師は、それぞれの学習場面の中で、子どもの気付きや考えに対して、「どうしてそのように思ったのか。」などの言葉で、その考えの根拠を深く問う、「掘り下げる」というのはたらきかけを行う。子どもの考えを明らかにして、造形表現への願いを確かなものに高めていくことで、学びの自覚をうながす。

そして、教師のこのはたらきかけは、対象とする子どもだけでなく周囲の子どもへも広がるようにする。「こういうことじゃないのかな。」と周囲の子どもの気付きに刺激を受け、漠然としていたものに意味付けがなされることや、新しい視点に出会うことも期待したい。

例えば、宇宙の住居の中には上下の必要がなく、部屋の中をどのようにしようか考えている子どもがいる時、どんな部屋になるか考えてみてはどうかと教師が学習集団に提案することで、子ども達の対話的な学びを引き出し、意見の交換が行われるようにする。材料の生かし方に新たな発想を得ることもありうる。友だちとの協同により、個性的な見方や考え方が影響し合い、考えが整理・統合され、新しい表現方法を見いだす力「問題解決力」の育成が期待できる。また、自他の学び方のよさを認め合うことができるので、「自己実現力」を伸ばすことにもつながると考える。

3 展開計画(全7時間)

次	時	主な学習と具体的な学習・内容	◇願う子どもの姿
1	1 2 3	○50年後の宇宙でくらす自分を想像しよう ・宇宙のくらしについてイメージする。 ・近未来の夢のようなくらしを材料の特徴や見立てとの関連から自由に発想する。 ・イメージ文や図・絵に表す。 ・アイデアスケッチを描きためたり、材料を並べたり組み合わせたりしながら、表したいことを明らかにしていく。 ・必要な材料や用具について吟味し、準備を進める。	◇自分が得ている知識や身近な資料をもとに、宇宙でのくらしを自由な発想で考えようとする姿 ◇今のくらしから関連付けて宇宙でのくらしを考え、材料の特徴に注目して、どのような形に表そうか試行錯誤する姿
2	4 5 6 7	○ペットボトルの内側や外側を生かしてつくろう ・宇宙での住居や乗り物などを作り表す。 ・中心素材のペットボトルや他の素材のよさや組み合わせの面白さを生かして作る。 ・のぞき込みたくなるように工夫して作品を仕上げる。 ・考え方のよさや表し方のよさについて、作品を見ながら振り返り、まとめをする。	◇表現テーマと表現意図が合致しているか見直したり、よりよい表し方を求めて作り方を吟味しようとしたりする姿 ◇表現意図に応じて材料を探し出し、自分や友だちの材料の生かし方や表し方のよさに気付く姿 ◇友だちと考えや作り方について意見を交わし、よりよい作品に向かって学び合おうとする姿

4 授業の実際

本題材の表現テーマ「50年後の宇宙での暮らしを考える」ことについて、4年生の子ども達は自分にとっての未来としてとらえることができた。50年前にはなかった現在の暮らしの様子から、夢や理想が実現しそうな思いを感じながら、自分の発想を広げ、考えをはっきりさせながら構想を練ることができた。また、中心素材であるペットボトルに出会い、その形や組み合わせの面白さから、「これがペットボトルでないとしたら、結構格好いい宇宙船に見えてきた。」などと、仲間との会話の中で見立てて考えながら、造形表現の活動について見通しをもつことができた。

以下に示す文章は、1次2時間目の授業後の日記である。

今日、図工がありました。「宇宙の暮らし」です。でも、それも未来だから、いろいろなものが新しくなっていると思います。そういう所もふくめて、材料を考えてやりたいです。(児童B)

児童Bは、表したいことのイメージを文章に書いたり、図に描いたりしてはっきりさせていく中で、自分の考えや願いをはっきりとさせていき、造形表現への意欲を高めている。また、表したいと考えているものについて必要な材料を考え、活動に向けて事前に吟味して集め、準備する姿があった(図2)。

これらの文章とともに、ふりかえりや図はポートフォリオとして蓄積させている。常に確認しながら進めることができるので、自分が今何をしたいと願っているのか確かめながら、表したいことをつかんだり、発想を広げる手がかりとしたりすることができる。学びを自覚する上で有効な手立てであった。

1次では表現テーマに出会い、表したいと考えていることを手がかりにして、それぞれの構想に合った素材の吟味をする場面を意図的に設定した。対話的な活動によって、子ども達は、

漠然としていた自分の考えを明らかにしたり、友だちと考えを共有する中で新たな考えに至ったりすることができた。次第に自分が表したいことを見つけ出し、より明確にしていく姿があった(図3)。子ども達は製作を進める中でも隣同士で、また、興味をもった取組の場所に集まって、常に対話的に関わり合い、考えのよさに気付き、作り方のよさを認め合い、楽しんで作り進めていた。

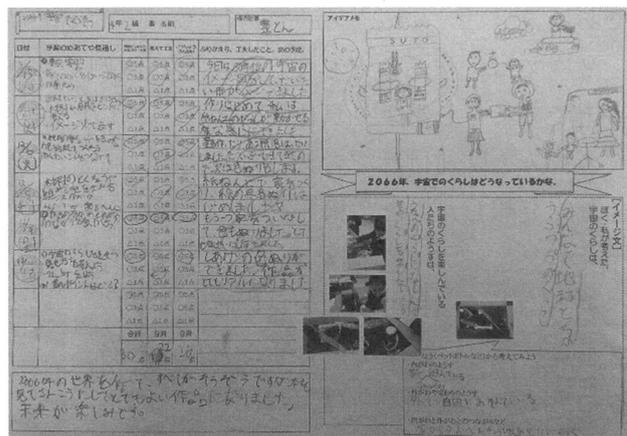


図2：ふり返りカード（ポートフォリオ）



図3：授業記録（掲示物）

教師はワークシートや子どもの言葉を手がかりにして「掘り下げる」はたらきかけを行い、子どもが自分の表現意図や心情などと、作品のつながりを意識し、自らの学びを自覚しながら造形表現の追求を進めるようにした。子どもは学びを自覚するほどに、表したい事柄について強い願いをもつようになる。造形表現の活動に対して高い意欲を示し、持続することができる。次の活動へ連続して行くように、活動の見直しをもつことができた。

ふりかえりからめあてにつなげるためには、具体的に何を指すのかということ、ふりかえりの場面に学級全体で明らかにしておく必要がある。学級全体で目指すものが明らかになると、それが次の学習でのめあてに連動しうるものになる。その中で、子どもは、自分の作品に対して何をしたいのかを問いとして再びつかみ、個の追求を持続させることができる。

また、子どもが既習の知識や技能、それまでの経験を生かして造形表現を追求するためには、子どもの必要感に応じて、試したり取捨選択したりする機会を保障することが大切である。必要感そのものを刺激したり、試したいことの幅を広げたりする上で、「提案する」ことは有効である。

2次では、作ろうとしているものの内側や外側に視点を当てて、作り込む活動を展開した。宇宙での暮らしをより具体的にイメージした時、子ども達はそこにある暮らしに必要なものを人の営みと関連付けて考えるようになってきた。発想したことや構想したことをより深く考えて追求する姿があった。中には、ペットボトル素材と相性の良いビニルテープを見だし、加工のしやすさと色をつけることを両立させる子どももいた。また、小物作りに適した紙粘土を持ってきて、色を練り込み、人物や家具を作って配置する子どももいた。その取組は、周囲の子ども達への気付きを刺激し、現実味のある未来を表す造形表現を目指して、取り入れようとする子どもの取組が増えることにつながった(図4)。



図4：「これは、いい考え！」

次の文章は、2次5,6時間目の授業後の日記である。

「イメージ+材料」

今日、図工で私は主に中の細かい部分のパーツを作りました。まだ、色はぬれていないので、色は、次がんばりたいです。明日は、1時間なので、今日みたいにじっくりはやれないかもしれないけど、もう自分が次の時間に何をすることがイメージできているので、材料も工夫して、自分が表したいことをより表すにはどんな材料が良いかも考えて、他の人が観ても、その物が何か分かるようにしたいです。(児童B)

児童Bは、表したいと考えていることを踏まえて、作りながら考え、見直しを図りながら見直しをもって追求しようとしている姿がある。願いは一貫しつつも、製作の過程においては試行錯誤を繰り返し、考えを更新したり、材料を更に吟味して追加したりしている。活動を見直し、自分の取組から学びを自覚しながら次時の活動に向かおうとしていることがうかがえる。

作品づくりの終わりには、作品を展示し鑑賞する時間を設定した。自分の作品をどのように展示するかを選択することになり、友だちの造形表現と関連付けて台上に並べて配置したり、

天井から吊り下げて空中に展示したりした。顔を近づけて内側をのぞき見る見方や、浮かぶ様子を見上げて鑑賞する見方など、どの角度から見て欲しいかにもこだわりをもって展示する姿があった。

5 おわりに

図画工作・美術科の授業の中では、一つの決まった正解がない中から必要なものを選び出し、創出する活動が求められる。ゆえに、子どもが、その時々に応じた学習動機をしっかりともつことが大切になると考えた。

教師が子どもに学びをしっかりと自覚させるためには、子どもが表したいと願っていることの中で、漠然としていることや曖昧になっているものについて、光を当てる必要がある。その光を当てるための関わりが、教師のはたらきかけとしての「掘り下げる」「提案する」ことに当たると考えた。

授業中、子ども同士の話し合いの場面をよく見るが、子どもは、自分が感じている問いを仲間になぞねて、意見を求めたり、よさを確認したりしていることが分かる。教師は、その様子を捉え、子どもの必要感に応じて、学習展開や教師のはたらきかけを修正しながら、小集団や学級全体にその考えをつなぎ、広げ、確認したり問い直したりする。すると、子どもは、気付きや確信を得て問いに対する一つの答えをもつことができる。子どもの考えは、統合・整理された状態になる。すると、子どもの追求意欲は高まり、高いままに追求が持続する様子が見えてきた。とりわけ子ども同士の関わりで見いだしたことへの追求意欲は高くなる傾向があり、授業後の休み時間や家庭でも作ったり、考え続けたりしている様子が見られた。

授業におけるふりかえりの場面は、学級全体での学び合いの一つといえる。「次はどのようにしたいのか」という言葉を用いて子どもの願いを引き出し、共通の視点をもって次への見通しを具体的に考えたことは、子どもが表したいと考えていることに照らし合わされ、多くの発見やつかみ取った発想が取捨選択されながら、有効なものが学びとして残る。このように子どもの個人思考と集団思考の間を問いが往来することで、学びが活性化される。ふりかえりの場面においても、教師の「掘り下げる」「提案する」はたらきかけは有効である。

自分や友だちの学びが何であったのかを明らかにしつつ、その成果や次への見通しをはっきりさせることで意欲的な追求が持続する。やったことの実感を感想に述べるだけでは気付きが浅くなる。作品を眺めた時に、「こんなことをしたんだな。次はもっとこうしたいな。」と思えるようにすることで、気付く、分かる、考える、見通しを新たにする、願いをもつ、意欲を高めることができる。自分の学びとして学び方を獲得していくことが、追求の仕方について的手段と意欲を高めていくことにつながる。最初は無自覚でも経験を積み上げていく中で、無自覚から自覚に発展することを期待して取り組むことができた。

今年度の実践は、確かな願いをもち、主体的に追求する姿を求めて行ってきた。子どもの願いを学習動機に高め、対話的で協同的な学びの中での気付きの質を高めることで、子ども達が自分の作品について語る姿が見られた。造形表現を通して創造力を育み、学び方を学んだことも成果と言える。

(文責 三桐 撰夫)